

## ガンバレ鎌倉シンポジウム開催

# 世界遺産登録の実際と鎌倉登録の可能性を探る

鎌倉世界遺産登録推進協議会、神奈川県・横浜市・鎌倉市・逗子市世界遺産登録推進委員会主催の「世界遺産登録にむけて ガンバレ鎌倉シンポジウム」が平成20年10月11日、鎌倉女学院 陸奥記念ホールで開かれ、稲葉信子さん（筑波大学大学院世界文化遺産学専攻教授）の基調講演に続き、工藤父母道さん（社団法人日本ユネスコ協会連盟評議員）、三浦勝男さん（鎌倉国宝館館長）を迎え、伊藤一美さん（国指定史跡北条氏常盤亭跡保存管理計画策定委員長）がコーディネーターとなってパネルディスカッションが行われました。会場には約100人の市民が参加して、3時間にわたる熱い議論に耳を傾けました。

### ◎ 「世界遺産登録の現状～」

稲葉信子 世界文化遺産学教授に聞く～」講演要旨



1992年、日本政府が世界遺産条約を批准してから、文化庁で文化遺産の専門官として世界遺産条約と真正面から付き合ってきた。

1972年にユネスコで条約が採択されるまでの間、（貴重な遺産を）祖先から受け継いで将来に伝えていくために、ユネスコでは条約を作る準備が進められた。

まず先立つものとして世界の文化遺産を守るための予算を、ユネスコがどうやって集めるのかということがあった。各国とも一般から集めるのか、政府が出すのか、総論賛成各論反対の状況で、48年から71年まで時間がかかった。60年から70年にかけて世界遺産の基とされるエジプトのアブシンベル神殿移築の第一期工事が行われた。併行して、国際キャンペーンを条約の形で効果的に進めようと世界遺産条約をつくる仕事が進められた。

世界遺産リストをどのように整えていくかというのが、根本的な問題である。ユネスコで考えているのは、リストとは国際協力の優先リストのことであり、国際協力の手続きのことでもある。現在878件の世界遺産があり、うち30件(2007年7

月現在)は危機遺産である。登録が厳しくなっているという議論の中で878件をどのように見るのか。いくらあってもいいではないかという議論もあり、もうすでに多過ぎるという意見も聞かれる。

世界遺産条約は出発点から顕著な普遍的価値(outstanding universal value)という一つのラインを引いている。この基準について議論が続いている。92年から約20年間に世界遺産を巡る状況はずいぶん変わってきた。30周年を経て40周年に向けて、これからどうしていったらいいのか検討をしているところだ。第一に枠組みの充実、第二にリストの信頼性の確保、第三に適切な保護管理、モニタリング・システムの確定などが主な検討課題になっている。

90年頃までは、確かにヨーロッパのキリスト教の考えに偏っていたと思う。そこで人の交流を精神的・構造的に考えようとした成果の一つが文化的景観である。多様性を重視した新たな言葉で生きている伝統を見直そうとしたものだ。文化的景観とは自然と人間の共同作品であり、自然と人間の多様なかわり合いを示すものとも理解された。人は自然から隔離されてできたものではない。92年に文化的景観が世界遺産の仕組みの中に取り入れられた。ブラジルのリオデジャネイロで地球サミットが開かれ、持続可能な開発という理念が広まった時で、世界遺産でも持続可能性の確保が図られた。

現在の文化遺産の世界でのキーワードは自然との共生、土地の持続可能な利用、文化の多様性、生きている遺産である。登録のために最も重要な『顕著な普遍的価値』の構築にあたって、失敗することがあるとしたらそれは何か。『顕著な普遍的価値』については広すぎるか狭すぎるかの判断が問われる。人間の自由だとか平和というのと広すぎて困る。ある建築のタイプというのと狭すぎる。その中間の価値をどうやって構築していくのか。国境を越えてその価値をどうやって広めていくのか。必要に応じて比較研究もしなくてはならない。国家的価値がそのまま世界的価値を持つわけではないので、十分な検討を加える作業が必要になるだろう。